

日本近代化と上野景範

—鹿児島県立短期大学40周年記念講演—

門 田 明

はじめに

今日は鹿児島県立短期大学の四十周年記念ということでお話をする事になりましたが、このような記念の日にお話しするのももっとふさわしい、学識のあるかたが、県立短大には沢山いらっしゃるのに私がお話することになりましたのは、多分わたしがこの20年間地域研究にかかわってきたためだろうと思います。

県立短期大学には地域研究所という機関があります。1972年に発足したのですが、英語を教えている私には地域研究などあまり関係のないことだと考えていました。しかし三代学長になられた虎頭先生から、イギリスにある薩英関係の資料を紹介してみてもどうかと、さそわれて地域研究を始めたわけです。この仕事をやってみますと、薩摩という国が、日本の英語教育の始まりに、大変深い影響を及ぼしていることを知りました。つまり日本の英語教育の始まりは、薩摩英学と深い係わりがあることがわかりました。

皆さんも、漢学とか蘭学とかいう言葉をお聞きになったことがおありでしょう。英学というのは英語を通して英語で表わされているいっさいの知識を学び取ろうという学問の方法をいいます。地域研究所で「鹿児島の洋学」——西洋を学ぶ洋学ですが——この研究グループをつくりまして、20年近く資料の紹介をしてきました。おもに外国に渡った薩摩薩士の日記類の収集と紹介ですが、一応の成果を収め、良い仕事ができたと自負しております。今日お話しします上野景範につきましても、履歴と三つの日記を地域研究所年報に掲載発表しました。この資料を中心にお話を進めたいと思います。

英語を学ぶ

今日のお話の題目は、「日本近代化と薩藩士上野景範」としました。皆さんの中には、日本近代化の話しが聞けると楽しみにされているかたがあるかもしれません。しかし日本の近代化というのは、なかなか大きな問題で、すぐに私の手におえる問題ではありません。今日私がお話ししたいと思いますのは、日本が今のような、高度の科学技術に支えられた自由主義大国になるために、越えてゆかねばならなかったいろいろな問題が、薩摩の最初の英学者上野景範という人物の中にどのように反映しているかということです。いわば、上野景範の人生に映しだされた日本近代化の歩みというものを、幾つかのエピソードを綴り

ながら見てゆきたいと思います。

上野景範は1845年1月8日（弘化元年12月1日）鹿児島塩屋町で、父泰助、母雪の長男として生まれました。テレビで「翔ぶが如くに」を見ておられるかたが多いと思いますが、西郷隆盛はその頃18歳で、郡方書役助という役についたところでした。

上野家は代々田布施の郷士で中国語の通訳を家業にしておりました。景範も4歳から清国語を学び始めます。ところが11歳になりますと、長崎留学を命じられ、蘭学を学びます。そして、しばらくすると英学に移ります。その後一度鹿児島に帰り、造士館で漢学を修め、16歳でまた長崎留学を命じられ、長崎英語稽古所でふたたび英語を勉強します。この清国語からオランダ語、オランダ語から英語へのめまぐるしい移動は、時代の流れをそのままに現わしていて、注目に値します。

日本とイギリスの関係は、三浦按針という日本名をなつたウィリアム・アダムズが1600年大分に流れ着いた時に始まります。1613年には平戸に英国商館が設けられ、日英貿易が行なわれますが、約10年後商館は閉鎖されます。その間イギリス人は大国薩摩を重視して、機会あるごとに接触を保っていますから、薩英関係もこの時期に始まったといえます。しかし、イギリスがオランダとの商戦に敗れて退去してからは、日英関係は長く中断します。この再開は、フェートン号事件がきっかけとなります。1808年、イギリスの軍艦フェートン号が長崎港に乱入し、役人の抗議も無視して、オランダ商館員を拉致します。その責任をとり長崎奉行は切腹します。これがきっかけとなって、長崎でオランダ人を先生に英語の勉強が始まります。1848年漂流を装って日本上陸に成功したアメリカ青年マクドナルドが英語国民として、はじめて長崎で蘭通詞に英語を教えます。かの福沢諭吉は、1859年、24歳で横浜に来て、オランダ語が何の役にも立たないのを知り、すぐ英語に転向して、独学で修得していますが、上野が英学に転じたのもこの頃です。英国重視の薩摩藩の先進性を伺う、ひとつの出来事と言えるでしょう。

日本の近代化は、英独仏などヨーロッパの先進大国に習って達成されたものですが、特に島国イギリスとの類似性は興味があります。近代化の過程は、地場産業の興隆→軽工業の発達→重工業という道筋を通るといいますが、イギリスではまず羊毛産業が起こり、紡績業を中心とする軽工業へと発展し、最後に重工業の隆盛をむかえ、ヨーロッパの産業革命をリードするのです。日本も生糸産業が起こり、紡績を中心とする軽工業が盛んになり、最後に重工業が起ってアジアの近代化をリードします。近代化は強烈な民族意識がエネルギーとなり、土地に結びついた封建国家から、ある種の理念で結びつく中央集権国家に移行するという側面を持ちますが、イギリスの場合プロテスタンティズムが指導原理となり、日本の場合、尊皇思想が近代化の牽引力になったのではないのでしょうか。このような日英の近代化過程での類似性は大変興味深いことに思われます。日本も国内で英仏の対立の影響がありましたが、最後にイギリスに軍配が挙がり、その後の日本の近代化にイギリス的な方向付けを与えることになりました。

上海に密航する

幕末多くの知識欲に燃える若者が、脱藩・密航して外国に行きます。鎖国下の海外渡航は死刑になりますから、文字通り命懸けの洋行です。近代化を支えるひとつの要因は、技術革新を可能にする知識の開放と、人的資源の自由な移動だと思われます。したがって、近代化は常に国際化をともなって来ました。幕末、一方では若者たちの強烈な知識欲があり、もう一方にはそれを満足させようとする環境が、次第に生まれようとしています。体制崩壊に先立って、意識変革が徐々に行なわれております。

1863年、長崎勉学中20歳の景範は、おなじ洋学書生であった安芸人小林六郎、備後人長尾幸作、日向人山下蘭溪とはかり、洋学研究のため上海に密航します。しかし無計画な洋行ですから、たちまち行詰まってしまいます。ちょうど、幕府の遣欧使節池田筑後守長発が上海滞在中でそこに相談にでかけます。最初はヨーロッパにいっしょに連れていってくれと頼んだらしく、池田はおおいにその気になりかかったといえます。さすがに同行の御徒目付齋藤次郎太郎が反対して、長崎に送り返されるのですが、表向き漂流人とし、密航は見て見ぬ振りをするのです。正使の池田が同行させたがったのも面白いと思うのですが、法を守る立場にある齋藤が密航をあえて不問にするのも興味があります。景範はのちに駐英公使の時ロンドンでその時の幕府の代表の一人であった河田熙に会い、当時のことをなつかしく真実のままに話すのですが、河田は相変わらず立て前えどおりで通そうとしたという後日談があります。

さて、こうして無事長崎に帰り、すぐまた鹿児島に帰るのですが、鹿児島の対応がまた振るっています。景範の父親は息子を自宅に謹慎させ、脱藩の大罪人として藩に届け出るので、受け付けた家老の書役市来宗之丞は、「それはよい気張りなり。惜しいことに今少し上海に居ればよかりし」といっただけで、何の処分もなく済んでしまいます。

さきに幕府の役人の対応といい、鹿児島での処理といい、時代が急速に変わってゆく様が、感じ取られます。

英学教師となる

1864年8月（文久4・7）、景範は薩摩開成所の採用試験を受け、その英学教師となります。

薩摩では先に斉彬の時代に洋学校設立の計画がありましたが、斉彬の死後洋学熱は冷め、1862年の生麦事件のあとは、むしろ反洋学の空気が支配していました。しかし薩英戦争の結果ヨーロッパの実力を知り、再び洋学の必要を痛感します。従来洋学修業は長崎留学が主流でしたが、1854年、前年江戸に開成所が開校されたのに対抗するかのよう、鹿児島に藩立洋学校「薩摩開成所」を設立します。授業科目を見ますと軍事教育が中心であり、また教員人材の点から蘭学が主流とならざるをえなかったようですが、景範は満19歳の若さで英学句読師を拝命します。後に、土佐の漂流民でアメリカで教育を受けた中浜万次郎

とか、日本郵便の父といわれる前島密なども、この開成所で教えますが、おそらく開校の当初は、英学者は上野景範ひとりであったと想像します。こうして景範は薩摩最初の英学者として、森有礼・松村淳蔵・高橋新吉など多くの生徒に英学を授けたと記録されています。森・松村は翌年選ばれてイギリスに留学することになりました。

景範について、いまひとつ興味のあることは、「藩洋書に乏しきをもって教育書数冊を編纂せり」と、履歴に記録されていることです。これは英語教師の私など大変興味のあるところですが、実物が残っていないのが残念なことです。われわれは、教科書とか辞書とか、ありすぎて困るような世の中にいるため、その重要性や有難さがわかりませんが、当時の洋学者は外国で出版された辞書などを手で書き写して使っていたといえます。日本で最初に英和辞典が出版されたのは、1862年幕府の洋書調所が出した、堀達之助編纂の「英和对訳袖珍辞書」ですが、もっとも権威ある辞書としては、ウェブスターの辞書が用いられていました。薩摩藩にも一冊あり、宝物のように取り扱われていました。上野景範がこれを借り出した借用のメモがあります。また前島密がこの辞書をうやうやしく拝観した話などが伝えられています。

近代化を可能にする土壌のひとつに、正しい知識の共有ということがあります。共通の国語の用法を記述した辞書があり、教育の普及によって国民がその知識を共有することが重要です。教科書は知識の整理、標準化、統一、などに大きな役割を果たします。英知辞典や英語教科書などによって、訳語が統一され、広く伝えられ、はじめて、輸入された機械を工場で多数の人が同時に使うことが可能になります。アジアで、中国でなく日本がまず近代化に成功した背景に、統一言語の問題があることも忘れられません。

お雇い外国人と働く

日本近代化を考える時、ザ・ヤトイと呼ばれた、お雇い外国人のことを忘れることができません。日本人が自立するまでの一時期、かれらは、大変な高給を受け取ったとはいえ、日本近代化の促進のためにおおいに働いたといえます。

1865年上野は英人機械技師ウォートルスと、製糖技師マキムタイラの通訳として大島白糖製造所に勤務します。この年、15人の留学生が羽島を出てイギリスに向かうのですが、この大島白糖事業は、留学生の経費捻出の方策として五代友厚が藩庁に上申しているものです。ウォートルス(Thomas James Waters)はこの頃来日し、1877年離日しています。彼は機械の据え付け調整および建設の指導技術者で、大阪造幣寮の建設が彼の関係した仕事でもっとも有名なものです。大島白糖工場については、その場所などまだ確定されていません。

景範は1867年開成所に帰り、同時に磯紡績工場に勤務します。有名なイギリスの外交官アーネスト・サトーの1867年1月2日の日記には、工場運営のため、サットクリフ(J. Sutcliffe)、ハリソン(H. Harrison)、シリングフォールド(N. Shillingfold)という三人の外

国人が磯に滞在していたことが書かれています。またウォートルズもこの三人に加わっていたようです。景範の役目はこれらのお雇い外人の仕事を円滑に進めるための折衝係の仕事だったでしょう。

1868年ウォートルズが大阪造幣寮を建設します。上野も関係しますが、このことはまたのちに詳しく話しましょう。

1869年、景範は灯台建設のため英人プラントンと、下田・長崎・佐多に出張します。プラントン (Richard Henry Brunton) は、1841年の生れ、明治元年 (1868年) 来日、新政府の灯明台機械方頭として主に関西方面の灯台建設に従事し、9年の雇用期間を終え帰国し、1901年60歳で亡くなっています。佐多岬の灯台工事は、外洋に突出した小島で大変な難工事だったようで、ロープ・ウェイを使ってようやく完成したといえます。

灯台建設は、幕府時代に結ばれた条約を履行するためのものでしたが、景範は政変のため新政府が引き継ぐことになった問題を、その後もいくつか処理することになります。

通貨問題・造幣局建設

経済の発展のために、信用のある貨幣が流通するということが不可欠です。明治元年新政府は造幣局建設を考え、ちょうど香港の造幣局が閉鎖されイギリス政府が機械を売りに出したので、それを買い取り、上野景範を受渡しのため旧暦三月香港に出張させます。

造幣局は最初横浜に設置することが考えられていましたが、のち大阪に建てることになります。しかし大阪のどこにするか、なかなか場所がきまらなかったところ、景範が香港から「もっとも水利の便の良い所を選ぶように」と建言し、淀川下流の現在の場所に決ったといえます。機械は十月下旬到着し、11月中旬機械の上から餅まきをして建設が始まりました。造幣事業というのは、非常に精密な仕事で、高度の総合的な科学技術が要求されるといえます。硫酸・ソーダ・コークス・ガスの製造所があり、日本のガス製造業もここに始まったとされますから、日本の化学工業は大阪造幣局に始まったといえるかも知れません。また、この造幣局建設は、先に大島白糖工場を建設したウォートルズがあたり、当時の代表的な洋風建築のひとつであったと言われます。

上野はその後も二度通貨問題に関係します。江戸時代の日本ではご存じのように両・分・朱という貨幣単位が使われていました。分は4分の1両に相当します。明治のはじめ諸藩にあった多量の贋造二分金貨がでまわりました。当時日本では金銀の価格が国際相場と違って、金が非常に安く手にはいったため、外国人は好んで金を手に入れようとして、この贋金を沢山つかまされ、それが外交問題になってしまいました。結局明治政府は外国の要求を入れて、二分金を一分銀に交換することにしますが、今度はその機会を悪用して金もうけしようという人間がでてくるわけで、明治2年上野はその検査のため長崎に派遣され、よくその任務を果たしたといわれます。

さらに明治三年には紙幣を発行することになります。これを外国に発注することになり、

「名工を選び精巧緻密で模造されないように。また同じ機械を別人にも造られることのないように」との命令を受け景範が出張します。最初イギリスでという計画が後にドイツに変更されますが、上野は監督など問題が起こらぬよう段取りを手配したといえます。

実際に兌換券がでることになったのは、明治18（1885）年のことですが、このようにして、明治政府の紙幣や硬貨ができあがったわけです。

移民問題と取り組む

近代国家の礎を築くため、明治政府は幕府時代の外交関係を、継続性を保ちながら、整理してゆかねばなりません。そのひとつにハワイの出稼ぎ人問題がありました。

ハワイ移民史によりますと、明治元年ハワイに渡航した人たちがハワイ移民の始めで、「元年者」と呼ばれています。ハワイは当時まだ独立国で、カメハメハ王という王様が治めておりました。幕末ハワイの米国領事館の書記をしていたウエンリート (Eugene M. Van Reed) という人物が、労働力として日本人を雇い入れるため、ハワイ代表として幕府と交渉しておりました。ところがこの許可の申請中に政変が起こり、交渉が長引くのを恐れて、こっそり雇い人を乗船させてハワイにつれて行ってしまったわけです。この密出国の問題解決のため、明治二年、1869年9月、景範はハワイに出張を命じられます。命令の内容は密出国者の召還となっています。

当時は日本からハワイへ直行便がなく、いちどサンフランシスコにゆき、それからハワイに渡ります。11月1日に横浜をでて、12月27日に着き、28日国王に謁見し交渉するわけですが、結局日本人労働者で帰国希望者は帰国させ、滞在希望者は契約満期に際しハワイ政府の出費で帰国させることで、話しがまとまります。それまで契約もなく不安定な身分であった、労働者の賃金など待遇も確定し、移住者のひとりを選び、事故の交渉責任者に決めて帰国します。帰路も同様サンフランシスコ経由で1月20日出発3月28日横浜着、2か月以上かかって帰ってきます。

本国との連絡も取れない中で、臨機によく取りさばいたとして、絹一匹褒美が下されています。

このハワイ出張は日記が残されているので、その様子がよくわかるのですが、サンフランシスコ滞在中、先に長崎で贋造貨幣で苦勞した二分金がどんどん輸入され外国をもうけさせているのを見て、早く法律を作って対策を講じねばと心配しています。

なかなか粘り強くて、交渉事には才能があったようで、その後も、マリアルス号事件、郵便問題など、重要な外交問題にかかわります。これはのちに述べましょう。

初代国鉄総裁になる

日本が最初に本格的に鉄道事業を始めたのは明治3年のことでした。ホレイショ・ネルソン・レイ (Horatio Nelson Lay) というイギリス人が政府に進言し、鉄道建設契約を結び

ます。景範は25歳で鉄道造営事務総理の職につきます。初代国鉄総裁ということになります。そして、この時15歳の幾子と結婚します。

さて、このレイという人物は中国で見習い通訳官をしていたのですが、1859年中国総税務司という職についています。1869年（明治2年）に来日し、言葉たくみに政府に取り入り、鉄道建設を請け負うのですが、どうもウサンくさい山師のような人物だったようです。日本人の間では、公使館に住むイギリスの要人で、有名な提督ネルソンの親戚と思われていたようですが、のちに公使館に住んでいたのは行くところがなくて、何かのついでで泊めてもらっただけで、ネルソン提督とは何のつながりもないことがわかります。

このレイの斡旋で、税関を抵当にイギリスで100万ポンドの公債を発行するのです。税関を抵当にとるなど前代未聞のことですが、中国で税務官僚で甘い汁を吸っていた経験からの悪知恵ではないでしょうか。これは余りにひどいというので、オリエンタル銀行のロバートソンという頭取が、税関の抵当なしで国債を引き受けようということになり、レイとの契約を破談にするため景範と前島密とがイギリスに派遣されるのです。

実情を調べてみると、1割2歩の年利のはずが9歩で公債が発行されている。レイがちゃっかり3歩ポケットに入れることになっている。公債発行を取り消そうとするが、そんなことは到底不可能だとわかる。仕方なく、すでに出回っている公債を全部買い戻そうとすると、話しが洩れて、たちまち公債の値段が5ポンド値上がりします。結局レイに大金を支払ってレイとの契約を解消し、オリエンタル銀行があとの面倒をみることになります。

近代化に鉄道の建設は不可欠のものでした。交通網の発達が発展させるのは、今も昔も変わりません。初期の資本主義経済は鉄道とともに進んでいったともいえます。イギリスとおなじ小さな島国に多数の人間の住む日本で、人工集中度の高い太平洋岸に鉄道が敷設されていったことは、効率よく経済の生産性を高め近代化を促進することになりましたが、最初の鉄道は、悪徳商人につけこまれて、随分高いものについたようです。

東京・横浜間に鉄道が仮開通したのは、明治4年5月7日（1871年6月12日）、開業式は明治5年9月12日に行なわれました。新暦になおすと開業は1872年10月14日です。そろそろ120年になりますが、開業式にはもと総裁の上野景範も出席し、お召列車第6号に乗車します。まさに、鉄道敷設の影の大功労者だったわけです。

マリア・ルス号事件

明治5年、景範は外務少輔になります。明治6年3月に外務卿副島種臣が清国出張中、マリア・ルス号事件解決のため、外務卿代理をつとめます。

1872年7月9日、ペルーの風帆船マリア・ルス (Maria Luz) 号が230人の中国人苦力を乗せて、横浜に入港します。たまたま苦力の中に逃亡者が出て、人身売買・虐待の事実が発覚します。イギリス代理公使ワトソン (R. G. Watson) がこれを取り上げ、事件を糾明する

よう副島種臣外務卿に申し入れがあり、日本政府が解決に乗り出します。

日本近代化のプログラムには、日本が国際的にも完全な主権国家になるという問題がありました。つまり不平等条約によって失った裁判権・関税自主権を取り戻すことです。マリア・ルス号事件は日本が始めてぶつかった、国内で起こった、国際的な人権侵害事件であったのですが、ペルーとは当時まだ条約が結ばれていなかったため、日本に裁判権があるのかどうか、が問題になりました。日本政府は日本に法権があるものとして、神奈川県庁を臨時法廷として審理を行ない、結局船長を無罪とし、船長と苦力の間に結ばれた契約の有効性を審理することになります。しかし、イギリス以外の外国公使は条約未締結国人に対する裁判は不可という立場をとり、ペルー政府も1873年特命全権公使ガルシアを派遣して、自国の裁判権を主張し、損害賠償とペルー国旗に対する侮辱の謝罪を要求し紛糾しました。結局ロシア皇帝アレキサンドル二世の仲裁で75年6月、日本側の主張がとおります。その間上野は7カ月の間、外務卿代理として交渉の最高責任者となったわけです。

軍艦の受け取り

日本は今は、経済大国・軍事小国の道を歩んでいますが、世界史上かつてこのような例は皆無だといえます。明治政府の政策は、当初から「富国強兵」ということであり、それが当時の世界の常識であり、それが近代化の課題でもあったと思われます。特に海国日本を自負し、海防には特別に力をいれ、当時の最新鋭艦を、当時の最強の海軍国イギリスにつぎつぎと発注するのです。上野景範はこの新造艦の進水式に出席し、妻幾子が進水の錨網を切ったことが、履歴に書かれています。

明治10年、金剛・比叡・扶桑という三隻の軍艦がロンドンで建造されます。日本最初の甲鉄艦扶桑は、明治10（1877）年4月14日進水、景範の妻幾子が錨網を切りました。金剛も同じ頃進水しています。また比叡については、比叡進水を祝う祝宴のメニューが上野家に残っており、その日付から、比叡進水が1877年6月12日ペンブローク・ドックで行なわれたことを、知ることができます。またそのメニューの内容から、造船会社の名前がミルフォード・ヘイブン (Milford Haven Shipbuilding and Engineering Co. Ltd) といい、設計者がリード (E. J. Reed) だということもわかります。軍艦の性能などについては、ロンドン絵入りニュースに精しい記事があって知ることができます。

郵便問題の交渉

明治11年7月27日、上野景範全権公使から、ロンドン発信の、寺島外務卿あての電報が届いています。電文は「英国政府は日本にある英国郵便局の閉鎖を約束した」というものでした。手紙や送金が確実に遠隔地に届くことを、いまのわれわれは、至極当然のこのように考えますが、少し考えてみると、信用が網の目のように張りめぐらされていて、同時にその存続を絶えず監視する強力な組織が存在するという、大変な背景の上になりたっ

ています。随って、郵便組織の円滑な運営は、近代化のひとつのバロメーターになるともいえましょう。日本は明治初期、自国を出入する外国郵便物を、みずからの手で取り扱うことができなかつたのです。日本政府は、外国宛て郵便物を、居留地にあるイギリス・フランスの郵便局に依頼して発送していました。外国からの郵便物もイギリス・フランス郵便局に私書箱を設け、そこから受け取るというありさまでした。外国郵便局の閉鎖と日本郵便局によるその業務の引き継ぎということも、条約改正のひとつの眼目になりました。当時日本はイギリスとの貿易が盛んで、輸入量も多かつたため、寺島外務卿から上野公使に特に指示があり、景範も条約改正に力をつくしたようです。この時、上野はイギリスと交渉し、鮫島尚信がフランスと交渉します。寺島・上野・鮫島という薩摩トリオが郵便権を日本に取り戻したといえましょう。

履歴書によるイギリスの立場は、治外法権については固執しないが、貿易上の利害については、権利を放棄することはできない、というものであったようです。英国郵便局を引き払う件は、明治12年10月10日、日英両国で約定に調印し、横浜、長崎、神戸にあったイギリス郵便局は、同年12月31日をもって閉鎖されることになりました。

精神を病む

今や30歳半ばの働きざかりとなり、数々の難事件を解決して、自信に満ちた人生ではなかつたかと想像します。上野景範の身辺は華やかさを増してゆきます。明治12年4月、帰国する事になり、途中アデンで三男武利太が死亡し、その地に埋葬するという悲しい事件もおこりますが、帰国後間もなく、後に蜂須賀侯爵邸になった、芝の和洋両式の立派な官邸に移ります。明治13年1月には、日本で始めて外国人を自宅に招き夜会をもよおします。招待客数百人、軍楽隊その他の余興があり盛大であったといえます。この夜の夜会については、クララ・ホイットニーの日記に記載があり、中村正直、福沢諭吉、グランド將軍夫妻、アーネスト・サトウ、西郷・大山両將軍、など多数の有名人の名前が見られ、景範の交友の広がりを感じさせるのです。

この年2月には、外務大輔に任ぜられ順調に官界を登ってゆきます。明治15年、特命全権公使としてオーストリア赴任を命じられ、同じく特命全権公使としてワシントンにむかう寺島宗則と同船しますが、寺島の印象では、その時いつもの活気がなく、あとで考えてその頃から病をえたのではないかといいます。

日本の近代化は余りに急速なものでした。不平等条約というハンディを負いながら、先進国に追い付け追い越せという、まさに悪戦苦闘の連続だったでしょう。短期間の疾走がいろいろな病弊を生む事になっても不思議とは思えません。現在、社会で活躍するいわゆるエリートと呼ばれる人々の中に、鬱病など精神疾患に侵される人が多いといわれます。

現在の正確な病名を知ることはできませんが、ストレスの蓄積が鬱病に転じるというような状況を想像させます。今なら治療の方法が十分にあったかも知れません。不幸なこと

ですが、景範は近代日本を造り上げた戦士として、病氣まで先取りしたようなところがあります。養生の甲斐なく、明治21年43歳の若さで逝去します。元老院議員、従三位が、彼の最後の官位です。

おわりに

ながながと上野景範について話してきました。日本近代化とか明治維新とかについて語られることは多いのですが、薩摩英学という私の研究分野から見るとまだまだ手もつけられず残された部分が多いという印象があります。先ず西郷・大久保が語られ、五代・森などの伝記が書かれ、近く寺島宗則の標準的な伝記が、吉川弘文館から出されると聞いています。資料の多い有名人から研究が進んでゆくのは当然のことで、かれらの研究が進むことでかれらと係わりを持った周囲の人々のことも次第に明らかになってゆくのですが、日本が現在の大国となり繁栄を極めるに到った道程に多数の実務家のいたことを忘れることができません。日本だけがアジアで近代化に成功したことがしばしば話題になりますが、日本以外のアジアの国が、少数の指導者と多数の下層民に完全に分断されていた時、日本には改革に即時に対応できる社会構造があったという事実も、この問題を考える重要なポイントになります。上野の場合、寺島宗則という良い先輩に認められ、その下であって幾つかの重要な仕事をしています。鹿児島ではよく自嘲的に「サツマのいもづる」といいますが、この「いもづる構造」がそのまま新政府のトップから底辺にいたる社会構造に移行し、近代化を極めて能率的に遂行させたことも事実ではないかと思えます。ひとつの問題提起として申し上げこの講演を終わります。

(1990年10月6日・於鹿児島県歴史資料センター黎明館)